



Memento-mori

ミュー

プロローグ

『なぜ泣いてらっしゃるのです？

おかげでびしょ濡れになってしまいましたよ。』

Memento-mori (1)

ピ——……。

最初に犯されるのは、耳だ。

次は皮膚を侵食する温度。肺に取り込む空気の湿度。鼻をつく異臭。この身にそれが触れる前から陵辱の儀式は始まっている。無音と無臭と無味乾燥のいつ終わるとも知れぬ孤独に終止符を打つのは、耳障りに間延びする電子音。それを僕の器官が認識する度、三つのことが脳裏によぎる。

いつ終わるのか。この生は。

いつ失われるのか。この思考は。
そして。

「ヒッ…」

水分を含んだ人ならざる肉の感触。それが左足の小指の爪を濡らし押し擦り正気を

痛ぶる。目隠しをされて全く見えないのは今となつては幸いだ。僕に侵入するこの物体の形状と色彩をまざまざと見せつけられたら、きつと嫌悪から衝動的に齒が舌を分離する。逃げられないのなら、まだ見えない方がマシだ。それに、視界だけは犯されずに済むのだから。

増える蠢くのたうつ人の悪意。それらはぞわぞわと砂糖菓子に群がる蟻のように、僕の皮膚を穴を内臓を食る。その分泌液で足はつま先から気化熱を発する面積を増やし続けている。スースーして皮膚の表面は冷たいのに、一枚下の肉は焼けるように熱い。でも、まだこんなのは序の口だ。

この世の終わりのような。どこまでも落ちて沈む孤独より悠久に長い拷問の口火に辟易し僕は思う。

界塚伊奈帆。

あいつは、どうしているのだろうか。

Memento-mori (2)

風化した記録媒体の映像である。

白い立方体の室内。扉は一つ。等間隔に並ぶ天井の照明は一割がその働きを失っている。照り返す光度の疎らな床の中央にスチール台。この解剖台は長方形で、人を三人は横にできる面積を有している。しかし、今そこに身を横たえているのは一人。覗き穴のないゴーグルで目隠しをされ、首と腰を皮ベルトで固定された姿は人形か死体を連想させる。服はない。肌には縦横に奔る傷跡と骨と筋肉の作り出す影。全く身動きしない。閉じた唇は血の気が引いて青褪めている。鼻の先から微かに捉える呼吸の音。

生きた人間である。

口輪をされているわけでもないが、徹頭徹尾喋らない。肉体は生命の灯が消えたように弛緩している。

ピ——。

扉が開き、一人の男が台車を押して入ってくる。翻る白衣の下に覗く濃紺の軍服。軍靴が床を打つ音と車輪が床を擦る音。解剖台の前で彼は止まり、ワゴンの上の機器の操作を開始する。古めかしいモニタ、キーボード。接続された大掛かりな箱。人の上半身ほどもある縦に長い箱は無機質なアルミの光沢。四つの側面には無数の穴。上面にはガラス。青白い光が天井に届く。キー タッチの音、イエスを示す電子音。箱が開く。

辺の一つを支点とし、ガラスの蓋が持ち上がる。成人の前腕よりやや細い太さの物体が不規則な動きで這い出した。液体金属のような質感で先端が少し膨らんだ、胴体に凹凸のない滑らかな大蛇に似た造形である。蛇の頭部を発光し、軟体動物のような動きで箱から台へと這い進む。動く度鳴るノイズ音。白衣の男は手を止め、モニタと台に事務的な視線を何度も往復させる。

台の上で拘束された人間が音を発した。胴体がベルトを軋ませ跳ね上がり、固定された首が赤い痣を作つて暴れた。

ぬめる液体は通り跡。青光りする触腕が白い裸体を這いずりまわる。人の胴体はしとどに濡れ、がん、がん、と頭蓋が金属台を打つ音が壁を震わす、ピ、ピ、と男が電子で次の指令を下した。

無数の穴から次々先端を現すのは、人の小指ほどの太さの触手。触腕と同じ形であり、同色に発光し、より小刻みに速く蠢き這い進む。向かう先にはやはり解剖台がある。

気が触れた呼吸と骨が軋む音。ひっきりなしに上がるそれらの音に、立つ男は耳を塞ぐことも顔を顰めることもしない。何も言わず、台の上の光景を三歩のところで見下ろしている。

無機質な人工物によつて、曝け出された人体は蹂躪される。無数の蛇が耳、鼻、臍、肛門、陰茎、肌の組織の細部に至るまで埋め尽くし薬品の分泌液と異物の質量が全身を侵食する。口腔から大蛇が喉、食道の肉をこじ開ける。頭部にセットしたゴーグルの線に沿つて、水滴が既に水溜まりを作っていたスチール台に線で落ちた。

尻の間に密集した触手はおどましい動きで数を増やし続けている。痙攣する腹は内

部から発光し、大腸の形を中ほどまで浮き上がらせていた。

そして青く光る喉と胸。口の端から涎と胃液と分泌液が悪臭を放ち次々溢れ零れる。しかし音にも匂いにも眼下の光景にも、人工物である触腕と触手にこの事態を命じた男は表情を変えない。無表情に、姿勢よく直立したまま何もかもを瞳に映し続ける。大きく体が数度跳ね、腹のベルトの金具が壊れた。内部から照らされたはらわたは一層光度を増し、圧迫された喉の隙間から隙間風のような呼吸音が長く尾を引いた。

影も与えず全てを暴く光量に、男の隻眼が微かに細まる。

ピ——。

開始と同じ終了の周波数。ノイズは止み、音は消えた。

体内の光が完全に消え、ずるずると引き上げられた無数の触手は元の場所に整然と収まり、最後に触腕がガラスの蓋を閉じた。

男の手が、意識を失った人間の頭部の毛髪に触れる。

Memento-mori (3)

「カ…ハッ…！ あ、あ、…アアアア!!」

この上ない生理的な嫌悪とおぞましさに反して、僕の浅ましい肉体の一部が疼き異物を欲し始める。耳に蓋ができれば、僅かでも正気を失うことの助けになるかもしれない。

「ウ……ッ、ア！ アア!! ヤ、ツア…!!」

排泄器官に異物が侵入するのが初めてなんて、そんな生き方はしていない。この場所を使われることは、自分では慣れていると思っていた。今まで人の一部や玩具が責め立てた最奥の先。そこをどこまでも進む触手により内臓と脳が悲鳴を上げ、自分の陥った状況のおぞましさに口から胃液を吐き出しつつも、僕は逃げることも出来ず意識を手放すことも出来ずにまだ僕に初めてがあったのか、と他人事のように驚いた。手足を這うずり回る触手にぞわぞわと爪の間指の間指紋の隙間を弄られ、逃れようと

力を入れるが手ごたえはない。ピン止めされた標本のような不自由極まりない状況の中、口では嘔吐しながらも陰茎は昂り、精液を溢れさす先端に触手が割って入る。括約筋は飲み込んだ触手を喰い千切るほど痙攣しつつ、一つまた一つとそれらは束を太くし肉を裂く。口から食道に満ち満ちた触腕の動きに喉が締まる。身体中を忙しない昆虫の速度と動きで這いずる長い長い尻尾の無い蛇の群れが、粟立つ肌に違う感触を残す。

「…ハアツ…！　ハ、ア…アアア…ア…ア…！」

ずちやずちやと水音を撒き口から触腕が身を引いた。怖気と寒気とすさまじい快楽の予感に身体が勝手に震え出す。手首が痛い。肌が纏わりつく触手の数を正確に認識し、次に動く先に感覚が集中する。硬く乳首が震え、そこに触手がざわりと寄る。ひどく痛いのに、蛇の先端の曲線の尖りを求めて身体が上下に揺れる。

「…ひツ…！　や、ヤア…アアアアア!!」

ジユクジユクと内臓の壁を擦り上げ、細い触手が道を戻る。腸を引きずり出されているような死ぬ心地に、気付くと前は勝手に達していた。触手が尿道の栓を抜き、張

り詰めた場所から熱い温度が股にぼたぼた落ちた。

「……ツア……、か、ア……！ アあつ！ あああつ……」

僕の涎と胃液を纏わりつかせた触腕が痙攣を続ける陰部へ押し入る。これが最も人の真似事が上手い。見えない視界で、過去の行為を記憶の中に盗み見ることが出来るくらいには。

「あつ……！ ああ、は……あ……つ！ ンアアアツ!!」

勘違いしたい。錯覚したい。失ったものがあるふりをしたい。自分にまだこんな欲望があったのかと呆れる。必死に正気だった頃の景色の破片を拾い集める。こぼれて落ちて、無くして捨てて、もう全部は見つからない。攫われそんな思考の一端で失われる理性のほんの端っこを引き寄せ、その絵合わせを試みる。

僕を呼ぶ声は？

僕を見る目は？

僕に触れる手は？

僕に重なった彼自身は？

か……。

意識が一瞬飛んで、また戻る。今自分が感じているのは、痛みなのか嫌悪なのか快楽なのかなんなのか、ぐちゃぐちゃに混ざり合って身体も頭もおかしくなる。見えな
いが聞こえる。動けないが感じる。確実に人ではなく、またおそらく生物でもない。
しかし生物の本能を模した玩具(という言い方が僕にはしつくりくる)に為すがままにさ
れて、され続けて、身体は与えられるものに順応していく。

音に犯される。

臭いに犯される。

湿り気を帯びた空気に犯される。

のたうつ蛇のような無数の悪意に犯される。

そして。

それを見る目に犯される。

分かる。見ている。この一部始終を息のかかるほど近くで。手を伸ばせば届く距離で。そいつが車輪のついた何かとともにやって来る足音を聞いた。吐く息吸う息を、意識のまにまに知覚した。見えない視線の色を見た。

手首が、お前に握られたように熱い。

——僕は。

僕はまだ正気だろうか。

そして。

こいつは正気だろうか、と思索している。

Memento-mori (4)

「……ッ！ ……、 ……！！」

見下ろす光景は、別段珍しいものではない。数日おきに一度、義務的に施行される生命維持活動だ。

胴体と首を固定しているので逃げられはしない。逃げたい気持ちはよく分かるが、仕方がない。ちゃんと吸収してもらわなくては困る。

大小の触手が絡みつく裸体を、かつて焦がれ求め熱を放ったその身体を、もはや如何なる意味でも性的に見られなくなってしまった。まだ僕は一応、人ではあったらしい。

「…………ッ、 ……！ ……！！ ……、 ……！！」

青白く光る腹を見ていると蛸という言葉が浮かび、自分の思考回路にうんざりする。僕は実際蛸を見たことがない。こんな風に、肉を透かして光るのだろうか。だとした

ら、生命の多様さに安堵する。色々おかしい僕らでも、この世界に居場所を望んでいいような気がする。

口から挿入した触腕は胃の寸前で光っていた。スレインの口から饅えた臭いの液体が零れ顎を伝う。この胃が食物を消化しなくなってもう長い。尻穴の部分に密集した触手は、腸から内部へ到達するものと尿道を開くもの、その周辺の彼にとって性感である個所を刺激する。快感を得ている方が、前進に労がない。無数の手がスレインの外側を撫で内部を這い進み、光と液を奥へ奥へと運んでゆく。

これは食事なのだ。

「……………ッ………!!」

そろそろいいだろうと、コンソールを操作し触腕を取り出す。粘性のある水音とえづく呼吸音。鳥肌を立ててスレインが小刻みに震え出す。少しでも楽にと、触手に愛撫の動きを伝達する。かつては、人の手で……僕の手で触れた様々な個所を、僕の作つた無数の手が無機的に暴く。

「……………ッ………!!」

腹から光が引いていく。蛸も、こんな風に点滅するのだろうか。負担の無いよう少し時間を掛けて、細い触手を一本一本取り出す。最中にエレクトがあり、尿道の触手を抜き去る。精液が開閉を繰り返す肛門を濡らした。

「……ッ………、…、………！ ……ッ！ ………ッ…」

様々な液体で濡れた触腕が痙攣を続ける陰部へ押し入る。スレインは気を散らすためか固定された首の上、頭を左右に激しく振って荒い呼吸を繰り返していた。腰のベルトが擦過傷をつくり、肌に血が滲んでいる。参ったな。後で治療しないと。こんな浅い傷でも、治りは気が遠くなるほど遅いのだから。その皮膚の下、肉の下を光る管が通り過ぎる。

「…っ…！！ ……、………ッ！ ………ッ！！」

絶頂に近い。触腕が大腸を過ぎ盲腸へ到達する間、触手はスレインの体のあらゆる場所をつつき締めつけ撫でまわす。何度も白濁が吹き出し、声にならない叫びが喉を震わせた。

まだ、声が出せれば楽なのだろうが。

そして行き着いた。光が右脇腹に。どく、と注がれる光と液。アルドノアの光と培養液。死に向かう肉体を生に繋ぎとめるこの行為。発光するエネルギーを余さず浸透させるよう、脳内麻薬に満ち満ちたオーガズムを長引かせるため震える箇所を人の動きで攻め立てる。スレインの体中へ光は行き渡る。蜚ではないか。身体の間々まで光る生命体は、後にも先にも彼だけだ。凄まじい光量が室内の全ての物体の色と影と輪郭を吹き飛ばす。その中で。

僕の右目に映す、スレインの肉体。

舌と。

耳と。

足と。

手と。

そして目。

それが既に失われたもの。

腐るのを防ぐために。死の瞬間を引き延ばすために。消失を恐れるあまり僕が繰り返すこの行動は、本当に僕の望みだろうか？

スレインは今でも「しにたい」と思っているのだろうか？
もう僕には分からない。

ピ——。

光が消え、セッとした液体のボトルが空になった。終了だ。

意識を手放す直前のスレインから、いつも視線を感じる。もう肉眼なんてどちらも潰れてない上に、ゴーグルで蓋をしているのに。

きっとスレインは、こう言いたいのだろう。

お前、正気か。と。

月色の髪を一度梳き、
瞼の裏の暗闇に返事をする。
正気かどうかは、
僕にもさっぱり分からない。

Memento-mori (5)

悪夢の終わりに思い出す。

「…幸福の王子って、知っているか？」

以前、伊奈帆にそう聞いたことがある。まだ目隠しもなく、手足も今よりは動いた頃。だから、彼が音を立てずにこちらを向き、目と耳を始めとする五感の全てで受けとめようと集中したのが分かった。僕だけを見ている。それが嬉しかった。

幼い頃に読んだ童話がふと思い出されたのは、違和感がささくれのように治らず胸にずっとあったからだ。どうして、王子は会ったことも話をしたこともない人々に自分を与えたのか。剣の柄の宝石飾り。両の目のサファイア。そして肌の金箔。一人で勝手にやって死んだのならそれでいいのだけれど、王子は燕を道連れに死んでいった。凍える冬に引き留め、羽ばたく先の空を彼から奪って。僕はそれがずっと引つ掛かつ

ていた。

同情を誘い、浣漑で純真な燕を利用した。夏しか知らない輝かしい鳥を、冬の檻の中へ閉じ込め、その生を弄んだ。今の僕には、王子の欺瞞は分かりすぎる。同じだ。僕と。そう思えてならない。

王子には、どうでも良かったんだ。病氣の子ども、飢餓の物書きも、裸足のマツチ売りの少女も。彼は目を差し出す理由が欲しかった。ずる賢く知っていたのだ。両の目を失えば、燕がきつとこう言うと。

『わたしはいつまでもあなたのおそばにいきましょう』

王子は思惑通りに、彼の燕を手に入れた。

同じだ、と思う。僕と同じ。不幸な素振りで同情を誘って、日向の男を泥濘に引き摺り下ろしている。どんな非道も、どんな悪夢も僕にはとても似つかわしい。しかし、どうして彼がここにいる。界塚伊奈帆が。夏の燕が。こんな寒く暗く澱んだ場所に。僕は狡い。こうも思うのだ。

冬など知らずにいて欲しい。けれども傍にいて欲しい。

相反する欲望に呆れる。いつの間に、僕はこいつに執着するようになったのだろうか。会わない間に身体を作り変えられて、浅ましい挙動をつぶさに見られ発狂するような羞恥を感じながらも、僕は。

開いた右目に彼が映り、まだ会えたか、と。その時胸中に訪れたのは確かに歓喜だった。

——あの時。

「…燕は、何を考えていたんだろうか」

界塚伊奈帆は瞬きをせず、逡巡した後こう言った。

「王子のことだろうと思うよ」

いつもの声で。正気をどこまでも保った知性と理性の平坦で。そして僕は。「…お節介な奴だな、と思ったんだ」

そう。あの時は。

あの時は、僕もまだ笑えた。

一般的な感覚を持ち合わせた人間にとつて、僕のしていることは異常だろう。小さい頃から、自分に向けられる戸惑いと恐怖そしてひた隠しの悪意を内包する視線には慣れていた。しかし、自分を自分でそう見る日が来るとは思ってもみなかった。

僕は今、スレインと二人きりである。…うん。もう少し、状況の説明が必要かな。ここはうらぶれた研究施設。僕らが来るまで人がいたが、殺して捨てて二人だけになった。この場所を選んだのは気まぐれでも何でもない。人目につかなくて、自給自足が出来て、いざという時は海に飛び込んで死ぬるから。ここは崖の上に建てられたバイオ研究所。

場所はそういうわけだ。次に理由だけれど。単純なことで、殺されそうになつて逃げた。スレインは死にかけていた。病院は無駄だと知っていた。僕がスレインと一緒に持ち出したトラック一台分の実験機器と道具と薬品などの生命維持装置を、誰にも邪魔されず使う場所が欲しかったのだ。

どうしてスレインが死にかけていたかについては、説明が長くなる。一言で言う、各種方面からの理不尽な暴力。僕の私情を交えるなら、僕の無力さと彼の不幸が最悪の形で噛み合ったこと。スレインを連れて逃げたのは、僕に一度だけ語られたささやかな願いを叶えてあげるためだ。

：本当に静かな場所だ。これ以上静かな場所なんて、宇宙の終わりくらいしかないんじゃないか。スレインは無口だし、僕も独り言を言い続ける趣味はない。彼の治療と薬の調合、失われた器官への代替品の開発など、するべきことに没頭する時間の隙間にひよっこり顔を出す空白の時。その静寂に耐えかねて僕は何度か崖に立った。でもこれが僕の悪癖で、最後の最後には死ねないんだ。死を回避する行動を取ってしまう。足を踏み出した途端後ろに倒れ込み、両足が地面から離れたら手が岩盤から突き出た草木を握り、着地点を探して受け身を取り。そのうち諦めて、海を見るだけになった。

スレインだけだ。

僕は自分に驚いたよ。まさか、こんな先の見えない袋小路に迷い込むとは。しかも

それが嫌ではないとは。まあ、毎日死にたくはなるけれどね。

スレインのことは、そうだな。極秘施設でチェスを打つことにもすっかり慣れて、味気ない面会室で軽食を共にするくらいの月日が流れてからのことを話そうか。

ある日、僕はいなくなった。

次に、彼がいなくなった。

僕が戻ると、彼はいなかった。

ふむ。分かり難いな。要するに、僕がいない間にスレインは作り変えられてしまっていたんだな。探し当ててからは、ひたすら彼を損なわないよう奮闘したのだけれど、思い通りにはいかないものだ。僕は、僕にこんなに諦められるものがあるとは知らなかった。スパーの特売とか、ユキ姉と会う時間とか。友だちと連絡をとることのできる立場とか、まだ幾通りにも広がっていた未来への道とか。

僕はスレインを死なせるわけにはいかなかった。スレインが死を望むうちには決して。だから、もう限界だと思った。死にたいと思えるうちに死ぬなんて絶対に許せないことだった。だから、僕はスレインを連れて逃亡したのだ。

分かるかな。分からないだろうか。それでもいい。僕もあまり分からない。自分の行動を説明するのに、こんなに苦労するのは初めてだよ。

スレインは既に手足と目と舌を失っていた。あと鼓膜。瀕死の彼の命を繋いだのはアルドノア。都合がいいなんて言わないでほしい。だって、それが無ければスレインはもっと前に死んでいた。最初の目の時とか、舌の時とか。…二回目目の目の時とか。この研究所に來た時既に内臓から壊死は始まっていた。スレインの体内のアルドノア因子はもうカラに近かったから、僕の因子を取り出して注入することは以前から試していた。一人で作業に集中できて良かった。器具との融合は割と上手くいった。因子も馴染んで、聴覚は機能を取り戻しつつある。幻聴と幻肢痛は誤差の範囲だろう。とにかく。あれから半年が経つが、まだスレインは生きているしそれに。

まだ、死にたいと願っているのだから。

話はこれで終わりだ。もし君が僕を殺したいと思ったら、こう言つてほしい。

死にたいか、って。いやだつて言うよ。
君が一緒ならね。

——ピ、キュルルル、ジジ…。
——プツ。

停止したデバイスの色は白と碧。
それを見据える隈の濃い隻眼。
彼の手の中のデバイスは白と橙。

——静寂。立ち上がり、男は今日も海へ向かう。

エピソード

『かわいそうに小さな燕は次第に寒くなってきましたが、しかし王子を置き去りにして行こうとはしませんでした、つまり心から王子を愛していたのです。』

∴Continued to “a mad-scientist × a electrical torso”